伏見（ふしみ）廃寺跡

大崎市教育委員会　髙橋誠明

所 在 地　宮城県大崎市古川大崎字伏見要害、伏見雨畑、神力地内

立地環境　大崎平野北西部、江合川右岸の標高35ｍの段丘

発見遺構　建物基壇

年　　代　８世紀初頭～９世紀

第１図　伏見廃寺跡、名生館官衙遺跡、上代遺跡の位置

遺跡の概要

伏見廃寺跡は大崎平野の北西部、ＪＲ陸羽東線東大崎駅から南側500ｍに位置し、江合川右岸の段丘上に立地する。北側200ｍには古代の官衙跡である名生館官衙遺跡があり、周囲は名生館官衙遺跡の関係遺構が広がる上代遺跡に囲まれている（第１図）。

伏見廃寺跡では真北方向を基準に造営される建物基壇が発見されている（第２図）。基壇の化粧は不明であるが、規模は東西17.6ｍ、南北14.6ｍと推定される。積土は開田等による削平で10㎝程度の厚さが残るのみで、基壇上の礎石を据えた痕跡も残っていないが、桁行５間、梁行４間程度の建物の存在が推定される。また、基壇とその周辺から瓦が多量に出土していることから、基壇上の建物は瓦葺であったことがわかる。

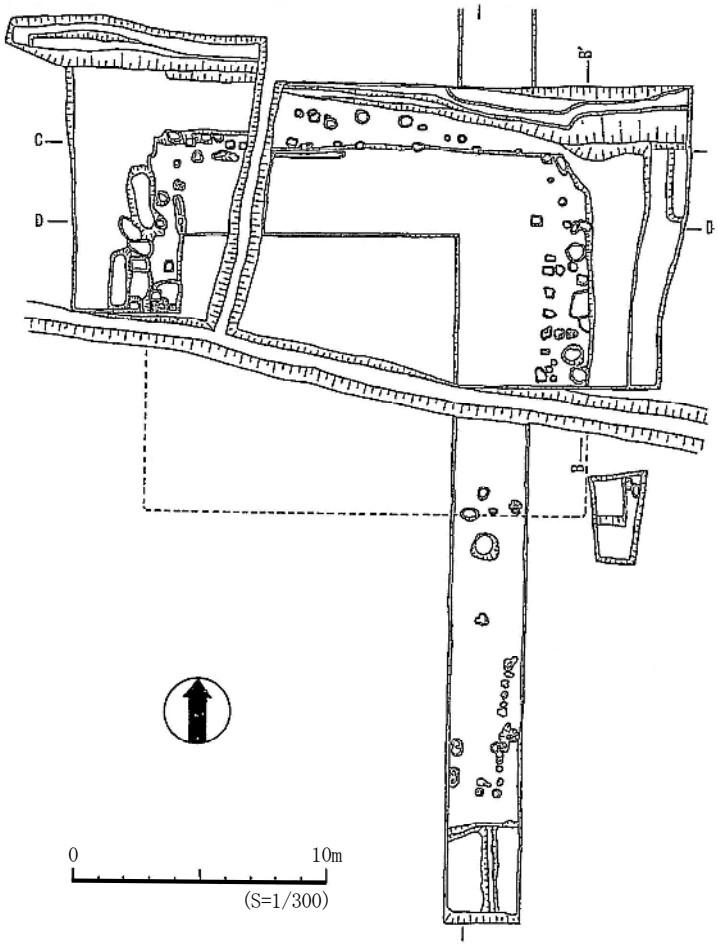
出土遺物には、発掘資料のほか内藤政恒による収集資料などがあり、瓦、土師器、須恵器がある。軒丸瓦には山田寺系の単弁八葉蓮華文が３種（第３図１：Ａ類、２：Ｂ類、３：Ｃ類）、重弁八葉蓮華文、素弁八葉蓮華文、素弁四葉蓮華文、樹枝文、珠文縁素弁蓮華文（第３図４）、複弁四葉蓮華文、軒平瓦にはロクロ挽き三重弧文（第３図５）、ロクロ挽き四重弧文、手描き二重弧文、押型格子文、素文がある。

伏見廃寺跡は古くは玉造軍団跡とされたが、発掘調査の成果から基壇上の建物は寺院の金堂と考えられている（佐々木1971a）。金堂以外の建物の存在が不明であることから、寺院は金堂１棟程度の小規模なものと考えられている（桑原1990、進藤1990）が、創建期の瓦と考えられる単弁八葉蓮華文軒丸瓦に３種類が確認されていることから、金堂以外の堂塔があった可能性も指摘されている（佐川2008）。寺院の性格は、名生館官衙遺跡の付属寺院と考えられる。名生館官衙遺跡の性格をⅢ期が和銅６年（713）に成立した丹取郡衙に推定し、丹取郡衙付属寺院として創建されたとする説（進藤1990・2010）、名生館官衙遺跡のⅡ期を地方豪族の居館と推定し、地方豪族が造営する寺院として創建され、その後、郡衙付属寺院として改組されたとする説（桑原1990）、名生館官衙遺跡を郡衙ではなく軍団施設と推定し、軍団施設の付属寺院とする説（八木2022）がある。

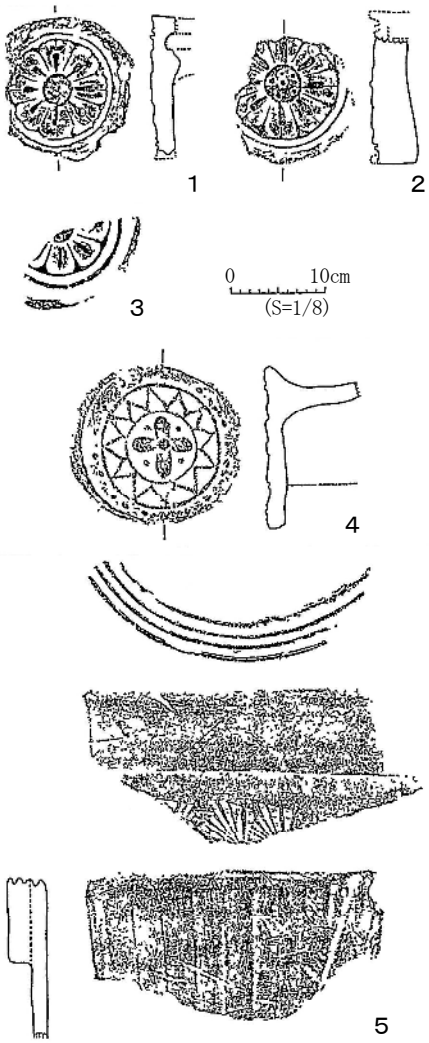
関連文献

石田茂作監修・原田良雄編1974『東北古瓦図録　内藤政恒先生蒐集』雄山閣出版
桑原滋郎1990「宮城県内の古代寺院跡について」『中新田町史研究』第２号

佐川正敏・髙橋誠明・高松俊雄・長島榮一 2005「８陸奥の山田寺系軒瓦」『古代瓦研究Ⅱ』奈良文化財研究所
佐川正敏 2008「東北地方の寺院造営－多賀城創建期以前の寺院－」『天武・持統朝の寺院造営１－東日本－』帝塚山大学考古学研究所
佐川正敏 2010「宮城県大崎市伏見廃寺跡の物理探査とその意義」『アークスⅢ』東北学院大学大学院文学研究科
佐々木茂楨 1971a「宮城県古川市伏見廃寺跡」『考古学雑誌』第 56 巻第３号
佐々木茂楨 1971b「宮城県古川市伏見廃寺跡出土の古瓦」『歴史考古』19・20 合併号
佐藤恒介 2019「伏見廃寺跡」『第 45 回古代城柵官衙遺跡検討会』資料集
進藤秋輝 1990「多賀城創建以前の律令支配の様相」『考古学古代史論攷』伊東信雄先生追悼論文集刊行会
進藤秋輝編 2010『東北の古代遺跡　城柵・官衙と寺院』高志書院
鈴木勝彦 2006「第５章　古代　506　伏見廃寺」『古川市史』第６巻　資料Ⅰ　考古
髙橋誠明 2003「名生館官衙遺跡の概要〈関連資料１〉伏見廃寺跡」『第 29 回古代城柵官衙遺跡検討会』資料集
内藤政恒瓦資料研究会 2015「宮城県を中心とする内藤政恒瓦資料（３）」『宮城考古学』第 17 号
古川市教育委員会・古川市図書館 1980『郷土資料目録（考古）』
八木光則 2022『古代城柵と地域支配』同成社



第２図　建物基壇平面図（佐々木 1971a）



第３図　出土軒瓦（古川市ほか 1980）